

最高の親孝行

本日参列した葬儀には、つらいものがありました。亡くなった方は、私と同世代の満六十歳。奥様と愛娘まなむすめ三人、そして、実のご両親を残し、突然お亡くなりになりました。残されたご家族の悲しみは計り知れません。つらいつらい葬儀でした。亡くなった方のご両親は八十歳をとうに超えていらっしやるように見えませんでした。愛する息子に先立たれたお母様は終始うなだれて目頭を押さえてみえました。お父様は気丈にしつかり前を見つめてみえました。私はお二人の姿を見て、遠い過去のことを思い出しました。

今から三十二前、私の父も突然この世を去りました。私が二十八歳の時です。当時寝たきりの祖母がいましたが、私がもの心ついたころから二人は仲が決して良くなく、いつも大きな声でケンカばかりしていたことが記憶に残っています。そんな親子でしたので、祖母に父が亡くなったことを知らせても、大きな動揺はないかと思っていました。

私が祖母に父が死んだことを伝えると、「本当か」と何度も何度も私に聞き返しました。そして、最後に私に向かって「T（父の頭文字です）に会わせてくれ！私をTのところに入れて行ってくれ！」と言いました。

私は小さくなった祖母を抱きかかえ、父のもとに連れていきました。そして、横たわっている父のそばに祖母を下ろしました。次の瞬間、予想しなかった行動を祖母がとったのです。

祖母は動かない体を必死に父の方に近づけようとして、細い腕を伸ばし父の布団をつかみました。そして、あらん限りの力を振り絞って父に近づきました。次の瞬間、父の亡骸なきがらにしがみつき、声にならない声で泣いたのです。

会話のない光景か、いがみ合った光景しか見たことのなかった私は言葉が出ませんでした。父の死は悲しいできごとでしたが、父と祖母の間に親子の絆があったことが初めてわかった瞬間でした。親子はいくつになっても親子なのだと実感しました。父がこの世を去った数年後、祖母も静かに息を引き取りました。今頃天国で、生前のように大きな声でケンカしているかもしれない。親子の絆がはつきり分かった分、安心して怒鳴り合っているかもしれません。

生徒の皆さんには親の本当の気もちがまだまだわからないかもしれませんね。自分のことで精一杯で、うっとうしがったり腹を立てたりすることが多いのではないのでしょうか。今は無理やりわかる必要はありませんが、いずれ時期が来たら、しっかり親の気もちを考えられるようになってくださいね。

あなたが生まれた時、最大限の祝福で包んでくれたのは、あなたの親ですからね。元気で頑張るあなたでいることが、最高の親孝行ですよ。
(六月二十三日 記)